

# 委員会報告

## 表紙写真の選考を終えて

学会誌表紙小委員会

学会誌第 83 巻の表紙写真を募集（テーマ：農村地域における農業施設・構造物：先人たちの技術と苦労が垣間見える造形美，平成 26 年 9 月 30 日締切）したところ，42 点の応募がありました。11 月 13 日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し，12 点を選定したので，ここに報告します。

### 講評

柳本 尚規（東京造形大学名誉教授）

今回は例年とくらべてより多彩な写真が集まりました。なかでも目についたのは，街中のビルのようなソフィストケートとは対極にある，機能と強固さにほとんどの精力を費やしたような建造物に対して，しかしそこに密かにこめられた，設計者の＜美しいもの＞への憧憬心を発見する写真が多かったことです。

不断に流れる水を分流する，堰止める，などの機能を重視すれば，それら構造物が美しくならないはずはありません。アーチ型や曲線が多用されるのも強度の確保からすれば当然のことですし，機能美というように理にかなった形は必ず私たちの目に美を意識させてくれます。これまでそういう発見が軽視されていたわけではないのですが，遺構，遺産という見方に傾いて

ディテールに目を凝らす気運が少し押しやられていたのかも知れません。しかしテーマに「……造形美」という文言が入ってから，除々に美しさだけを感じ取っても，いやそうすることで構造物の機能や歴史といった文化性が見えるようになるのではないかという感じが前面に押し出てくるようになったのではないのでしょうか。

そういう目で見ると，農村地域における施設・構造物はみてくれでつくられたものなど一つもないのですから，その凝らされた機能性のなかにもっともっと美的なものを，人々の美意識を発見できるのではないのでしょうか。

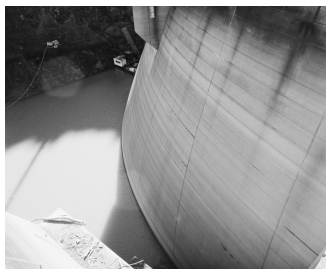
私も，堰やダム，用水路などの要所を見ていてこれを設計した人はこの形にこだわったようだ，ちょうど光が当たるようにこの色を配したんだなというような発見をよくするようになりました。くらべて都心の再開発ビルの工夫のなさががっかりすることもしきりです。

見落としはまだまだありそうだと肝に銘じて，技術者たちの美意識をもっともっと発見してみたいものです。

今年もまた，例によって雑ばくで恐縮ですが，各号の表紙を飾る写真から触発された一部を書き記してみました。

## 第83巻表紙写真入選作品

1月号



大迫ダム (和田清男)

量感! ヴォリューム! じつに豊かな存在感。これを撮った人が「頼りがいのある力強い大きな背中」と副題を添えている。<力強い><大きな>と二重に強調しているのだが、たしかに生き物の意思や呼吸を想像させる。このダムのミッションを巧まずして教えてくれるなんとも風通しの良い写真である。

「紀ノ川」上流の村の素封家に生まれた女性が川を下って舟で嫁入りするところから始まり、その娘、孫と三代に続く女性たちの生涯を物語って、映画化もされた有吉佐子の名作の基調となった紀の川(吉野川)である。大台ヶ原から発してとうとうと流れている姿と、大洪水に荒れ狂う姿が、いまま私の記憶に焼きついている。

一方で穀倉地帯でありながら濁水を悩む山を越えた奈良盆地は紀の川(吉野川)の豊かな水量を何とか引き込めなかつた、そこに確執の歴史があった川だ。その末にできた写真のダムは、戦後の食糧事情への対策としてつくられた灌漑、上水道と発電の多目的ダム。

この写真の量感を見ているだけで、ダムにまつわる物語が見るものなかにさまざまにつくられてゆくのではないと思う。シンプルにして饒舌な写真の好例。

4月号



新緑の銅山川疎水水路橋 (近田昌樹)

旅をしているとふと写真のような構造物にあって不意を突かれることがある。石炭鉱山にあったあたりにはそのく廃墟も施設も珍しくないが、この写真の施設のところに立てばきつとあの音が聞こえてくるに違いない。風が吹き抜ければ細かいしぶきも舞ってゆくかもしれない。

さらさら、そうそう、しゅるしゅる、びちゃびちゃ……。そこから聞こえてくる水流の音はどんな言葉で表すことができるかしばし写真に耳を澄ましてしまうが、ここは四国中央で水利に苦しんできた地帯に引かれた生命線のような疎水の水路橋である。

徳島県に流れる吉野川水系銅山川に建設されたダムを水源として、法皇山脈を貫き、愛媛県四国中央市の宇摩平野まで流れる、宇摩地方の農地を潤し四国中央市の製紙産業などを支える重要な疎水だ。その開通とともに画期的なことだったが、ダム建設のプロセスも記した「銅山川疎水史」(合田正良編、愛媛地方史研究会(1966))にはこんなくだりがあるようだ。

「馬瀬に集う人々の顔はみんながみんな喜びに輝いている。隧道口にしゃがんで水の出を待つ人々の眼は百年もの長い間待ちに待った歴史的な光ささも帯びているようだ。

あゝ水だ! 出たぞ、瞬間の歓声が宇摩郡民にとっては正に手にすくい上げては喜び合う人々の顔、歓声のルツボである。一升瓶に詰め込まれ水は黄金の流れだ、手に手各自の家々に持ち帰られるであろうが、この水で、今夜の一家団圓は、一層の賑やかさを醸し出すことだろう。山中を流れた疎水の使命が目に見えるように想像させてくれる写真である。

2月号



奥入瀬川南岸下田堤 (丹治 肇)

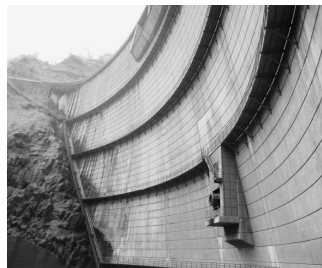
この空と地を分かつ光景は誰のなかにさまざまに記憶としてある。傾いて弱まった光とシルエット。その中でもなお存在を示す水面と泡立つ水流。夕日は時空の遠近感を感じさせる。さまざまな喻えにもなる。もともと川そのものも喻えの王様だが。

だからこの写真は誰の気持ちの中にも物語化して浸透してゆく。しかしこの写真で大事なものは頭首工の脇にうつつと見える魚道の施設である。

堰のある十和田市は北の三沢と南の八戸の間にあって、十和田湖に始まる奥入瀬川を海に送り出している町。写真の堰は奥入瀬川の最下流に位置するが、川の流域にはいくつもの頭首工があってそれらにはみなアユやヤマメ、サクラマスなどが自由に遡上できるようにと地域力を結集した検討成果の魚道の整備が計画的に行われているようだ。

夕暮れにたまたまこの河川施設の光景を眺めていると、自然との共生には何が必要なのかという関心を不断に持ち続けていなければならないことを思わせられる。防御と利便という名ももの経済の傲慢に傾いたものではない共生の施設だけに、夕日同様の自然性を感じさせるのだろう。この写真はこんな感想をも自然に導く。

5月号



曲線美の刀利ダム (佐藤和彦)

刀利ダムの水底には五つの集落からなった刀利村が沈んでいる。もともと沈んだのは三つだがあとの二つの集落も廃村になり、村の歴史が終わったわけだ。山の幸、川の幸に恵まれ、炭焼きも盛ん、農業で潤っていた村だったとある。

目を浴びてあったときの村のアルバムを見たが、なんとも不思議な思いがつのばかりだ。記憶が水底に沈んでいるという夢のような事実をどうやって実感できるだろうか。写真が記録、そしてその記録を超えられなくなる記憶。壮大に美しいアーチ型のダムは全長7kmにおよぶ人造湖をつくりかつて暴れた小矢部川の水を満々に貯めているが、その水底には夢になった事実があったということである。

西部は石川県、南部は岐阜県と接する富山県南西端にある南砺市。そのさらに南西部にあってまさに石川県との県境線になっているこのダムは同年代につくられた黒部ダムと同じドーム型アーチ式ダム。本体に設置されたオレンジ色の通路(キャットウォーク)が印象的だ。そこに注目して美しいフォルムの強調に成功した写真。

というか、この写真を通して、デザイナー(設計者)の快哉が聞こえるようだ。このダムの設計にはたくさんの方が携わったであろうが、その中の誰かが仕様を固めたのだという、個人の息吹を感じさせられる粋な写真となっていると思う。

3月号



春の三ツ口池 (都築佳子)

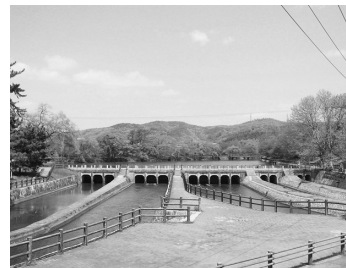
目をスクリーンのように画面上を移動させる写真だ。中心に向かって、ということはある意図されたものらしいところに向かって目が引き込まれてゆくのではなく、すべてが等価で周辺であると言われるべきものは何一つない。そういう思いに溢れた写真。

逆に言うと、写真がそういう思いを湧かしたたせる動機になっているのだと思う。手前の岩、新緑の樹木、萌え始めた桜、時を待つ田、それに備える水の蓄え、それらを取り囲んで守っている森、時に合図を送る人の暮らす集落。写真のなかのすべてが同じ時を共有し始まりを待っているかのような、その一体感に共感をもたられ、<等価>の発見してくれる写真。

主題は豊川用水の調整池だが、画面の片隅に見えるだけで存在感も十分。この下部にもろもろがぶら下がっているという組織図さながらのツリー状況が十分に分かる。

というのも愛知県東三河地方は昔から幾度となく干ばつに悩まされてきたところで、豊川の水を引くことが再生の切り札だった。上流にダムを造って水を溜めそこからの導水路、用水路そして調整池。三ツ口池もその一つ。戦後直後の大がかりな国営水利事業のはてにできたこの調整池も、いまはもう40年以上の歳月を経てすっかりと新たな自然としてなじみあった。池が主役だと語らずに教えてくれる写真である。

6月号



東西用水 南配水樋門 (谷本浩一)

シメトリへなるもの既視感が与えられる景観だが、よく見ると微妙なズレに気づき、そしてさらに水量に応じた橋脚にも相当するだろう樋門の数と用水路の幅の違いを感じさせられる。目の錯覚を遊ばせるかのようなこの写真は、さかのぼってやはりシメトリカルな撮り方の巧妙さにある。

15の配水樋門が並ぶ写真の南配水樋門は、日本最大の農業用樋門と評価されているようだ。鳥取県境に近い新見の花見山麓を源流として高梁市・総社市を経て、倉敷市で水島灘に注ぐ高梁川は、岡山県西部を流れる一級河川。その倉敷には江戸時代から続いた干拓と高梁川が運ぶ多量の土砂によって広大な土地の穀倉地帯が形成され、そこへの用水を担ったのが高梁川。多くの樋門から取水していたが洪水被害が連続したこと、明治末年に国が高梁川改修工事に着手し、併せて各樋門を統合して写真の場所・津津に取水樋門と配水池をつくらせて、14年の歳月をかけて大正末年に完成されたこと。

なお、農業用水を合理的かつ公平に配分することを目的に、大正5年に「高梁川東西用水組合」が設立されている。

端正なこの樋門が美しくいまも健在なのは、周到な管理もさることながらこの景観を愛する人々のまなざしがあればこそとあらためて施設と人々の親和性を印象づけられることだ。

7月号



**猿喰(さるはみ)新田潮抜き穴(中島正憲)**

何の遺跡か、と、まずはなマークが頭に渦巻くが、これは北九州市門司区猿喰新田の悪水(塩水)を海に流すための排水用樋門の一部。江戸時代中期につくられたものだそうで今から250年くらい前の構造物、ということになる。すでに使用されなくなってから久しいので周辺は雑草に覆われてなかなか構造を解説できないが、要するに干拓してつくった新田に進・浸水してくる塩分の濃い海水を海にはき出す装置で、干潮時にはこの機能が働き、満潮時には扉が閉じて海水を入れない、というじつにすぐれた装置である。

飢饉で飢餓に苦しむ人々のために土地の庄屋が私財をなげうって行った干拓事業、そして付帯の潮抜き穴と呼んだ装置の工事だった。その卓越した発想と人力で作り上げた計り知れない知恵と労力に感嘆するばかりだが、石や石灰を使ってコンクリート状の接着材を巧みに活用している、その時代の<常識>もすごい。

門司の固防灘に面した側、新門司港に近い猿喰新田に近いあたりは、Googleの画像で見ると埋立が続いてきたところであることがよく分かる。疎水とは逆に、配水の樋門も同時に考えなければならなかった農業で、それによって生みだされた技術の多大さを、この<謎>の遺跡の写真が物語っているとさえいえる。

10月号



**美生ダムを駆け下る水(稲葉健司)**

水の表情。こんな肌理(きめ)を見せることもあるのかと水の豊かな変容性に驚かされる。

この独特な肌理を見せてくれる美生(びせい)ダムは北海道帯広市に隣接する、畑作・酪農が盛んな芽室町の、十勝川水系美生川の日高山脈にある灌漑用水供給専用のダム。保水力に乏しい芽室地区の水不足を解消する目的で灌漑用水を山麓の農地へ供給している。

複数の形式を組み合わせたコンバインドダムといわれるタイプ。コンクリート壁を勢いよく下った水は横下方の階段状の減勢工に受けとめられ、さらに下方で段丘状の岩石や土砂を積み上げたように見える副ダムを経由して河川に放流される。

水流の、鱗のような、あるいは銅をたたいた肌理のような、この独特なテクスチャーをつくるダムのコンクリート壁の表面はどんな形状になっているのだろうか、どんなカーブが入り交じっているのだろうか、思わず水流の裏側を見たい衝動に駆られるけれども、滝ではないからまわることができない。この写真には、そんなもどかしさをいじかせる、想像をいざなう力も潜んでいるのだと思う。

8月号



**御坂サイフォンー眼鏡橋ー(合田 弘)**

美しい姿の水路橋上に人の姿の群れが見える。観光客だろうか、その群れも一体となってこの水路橋の<人格>が如実に表された写真。

三木市は神戸の北西に位置して明石と同じ東経135度の日本標準時子午線上に位置する町で、運動施設や田畝が連なる東部、志染町御坂というところに御坂めがね橋がある。そもそもめがね橋と呼ばれる水路橋は、水に恵まれずに稲作を果せなかったところに水を引くに当たって、その川からは交差するもう一つの谷川越えをさせなければならず、そこで農業用水路としては国内で初めて鋼管を使用したサイホン工法を採用した川をまたぐ水路橋となった。石造り、アーチ型の橋の上をイギリス製の鋼管が敷設された。谷を越えて疏水の水を送り渡す役割である。

設計・管理に当たったのがイギリス人技師H.S.パーマー。御坂サイフォンと同じ時期、横浜市の水道の水源地区を相模川の上流に求めて神奈川県津久井(現相模原市緑区)にその施設をつくったのもこのパーマー。内務省土木局名誉顧問だったパーマー少将。いわゆるお雇い外国人の一人である。

そしてこのめがね橋。人影のある橋に並んで奥に本来の水路橋が寄り添っている、というより本来の水路橋は姿をそのままにして、隣に同型のコンクリート橋をつくって、本家を守っていると言わなければならない。その姿もいかにも擬人化したかに見えてきて美しい。

11月号



**大谷内ダム貯水池(毛受亨政)**

まさに貯水池。澄んだ空の青色を映して、その静かな水面が美しい。しかしこの貯水池の果たす役割の何と重要なことか。その重要さをうかがわせる、映画のファーストシーンのような暗示的な写真である。

新潟の津南の方へゆくと、その農地の多くは河岸段丘上にあり、一番下の方を川が流れている。棚田もそうだが、この河岸段丘の農地はどの風景だが、その作業を想像するとややこしくなる。

しかしじっさいやこしいのは本当だった。河岸段丘上の水田、畑地の用地確保に国営の大事業が戦後間もなくからついこのあいだまで続いていたのである。国営苗場山麓事業と呼ばれるのがそれだが、三区に分けて計画進めた事業のうち、写真の大谷内ダムの事業は苗場山麓第二地区事業で1975年度に始まって99年度までかかったという。大谷内ダムの新設をはじめとする農地造成、用水路や農道整備などの諸工事である。ダム貯水池すべてが堤体で囲まれ、その長さは1,780mで日本一となるのだそうだ。

豪雪地帯としても知られるこの地方はいまは豊富な農産物の生産地である。だが幹線沿いにある家並みはみな高床式?でもいうような地面から下駄を履かせたような具合で立ち上がっている。もちろん、豪雪に備えて家の玄関が雪に埋もれないようするための形である。そういう条件の悪さも、この写真にある美しい静かな貯水池が克服の手だてになったということになる。

9月号



**馬飼頭首工(小池義夫)**

ロボコップの頭部のようなゲート機械室。ずらりと並ぶ窓が左右の目のように見えてくるが、画面手前の堤防の雑草が人心地をもたらししてくれる。ふと撮影をした人のそのときの感覚を体験させられるような臨場感ある写真である。余計なことだが、「頭首工」を見るたびに私はこの言葉が頭首工の私たちを一定程度の画一性に導いたのか、機能からつくられた形が馬の首のようだったから定着したのか、英語ではヘッドワークスというのだそうだがどれもが少し的を外しているように思っている。

横道にそれたが、馬飼頭首工は木曾川河口から26km上流にあって、そこから下流は汽水域になることもあるそうで、その海水域で生まれたアユが淡水の川に遡上できるように魚道も設けられている。この堰のある稲沢市は、愛知県濃尾平野中央部にある町。この旧祖父父町は銀杏の産地としても有名。堰は木曾川の水を愛知・三重両県の農業用水、工業用水、水道用水へと用途をかねて供給する。そこにさらに魚たちの移動への配慮と忙しい。それを何食わぬ表情でこなしているのかと思えば、そのロボコップのような機械顔にも親しみを覚えさせる写真だと思う。

12月号



**初冬の愛本堰堤(松本祥二)**

こういう施設が寒々しい空気感のなかにたたずむのを見るときこそ、人の営みは人の力だけでは維持できないのだということを思わされるものだ。山間や水流の施設を見るたびに、自然の力の巨大さも思い知らされる。堰堤、あるいは頭首工と言われる施設は自然と人間生活の境界線とその守備装置としてある姿に見えるのは、私たちの自然への畏敬の念の証拠なのだとも思える。

写真の愛本堰堤は黒部川にあるダムの最下流にあるもの。現在の愛本堰堤は2代目だそうで、先代はまだ黒部川に大規模電源開発がやって来る前につくられて灌漑と一部発電用水としても使用された。しかし大洪水時に損傷し2代目は先代の場所の少し上流に再建された。黒部川もこの愛本堰堤からは平野を流れる。そして典型的な扇状地を形成した。黒部川扇状地は花崗岩質の透水性の良い砂礫層でできているので地下水が豊富で多くの湧水がある。

この地方に特有な散村の点在も水が豊富であったために農耕にも便利で集落の立地がし易かったからだと言われるが、砺波平野の独特な散村集落の景観と並んで愛本堰堤の下流域の景観も水と生業の不可分な関係を教えてくれる。この写真の堰堤が扇状地形成に貢献したことも大きいと言われていれば、この飾り気の一つとしてないコンクリートの構造物が生き物のように見えてくるのだ。